

徐小曼・楊棟文・小泉政利（東北大学）

【要旨】本研究は、セデック語（オーストロネシア語族、台湾）の談話を中心化理論（Centering Theory, Grosz et al., 1983, 1995）を用いて分析した。中心化理論は談話における情報構造と情報の流れを記述・研究するための枠組みである。この理論は既に英語をはじめ世界中の多くの言語の分析に用いられ成果をあげているが、対称態（Symmetrical Voice）を持つ言語に適用した例はほとんどない。そこで本研究は、中心化理論を用い、対称態を持つ台湾原住民言語であるセデック語タロコ方言（以降単にセデック語と呼ぶ）の談話分析をすることによって、対称態言語における遷移（transition）と後ろ向き中心（Backwards Looking Center, Cb）の指示表現及び態との関係を考察する。分析の結果、この言語では典型的な談話進行のストラテジーとして、空主語を持つ動作主態の文を連ね、その中に独立代名詞を主語とする目的地態の文を挟み円滑にトピックを変更するということが判明した。

1. セデック語——対称態

セデック語は台湾の原住民族セデック族が使用する言語である。オーストロネシア語族の台湾原住民諸語に属し、約2万人の話者が存在する。本研究では、セデック語タロコ方言の話者による「Pear Film」の描写データ（月田, 2018）を使用する。Pear film は言語学で使われる1つの短い動画のタイトルである。様々な言語の複数の話者によるこの動画の描写を分析・比較する目的で用いられる。本研究では2人のセデック語話者に Pear film を視聴してもらい、動画を見ながら、あるいは動画を見終えてから語ってもらった計3つのナラティブを分析対象とした。

セデック語は、オーストロネシア語族西部語派に属する他の多くの言語と同様に、形態的に同程度の複雑さを持つ複数の態を持つ（Aldridge, 2004; Foley, 2008; Riesberg, 2014; 月田, 2009）。そのような態のシステムは対称態と呼ばれ、英語の能動態と受動態のように形態的に有標・無標の区別がある非対称態と区別される。具体的には、セデック語には、動作主態（Actor Voice, AV）、目的地態（Goal Voice, GV）、移動物態（Conveyance Voice, CV）の3つの態があり、態の種類によって動詞に異なる形態素が付与されるが、どの態も形態的複雑さに大きな違いはない。(1a-c) は、「母親が子供に薩摩芋を与えた」という同じ事象を3つの異なる態で表している。動詞は異なる態マーカーを持ち、(1a) では「母親」、(1b) では「子供」、(1c) では「薩摩芋」が主語となっている。主語は主格マーカー「ka」で標示される。

- (1) (a) m-egay buNa leqi-‘an ka bubu.
 AV-give sweet:potato.DIR child-OBL NOM mother
 “The mother gave sweet potato to a/the child.”
- (b) biq-an buNa bubu ka laqi.
 give-GV2 sweet:potato. DIR mother.GEN NOM child
 “The/A mother gives sweet potato to the child.”
- (c) se-begay bubu leqi-‘an ka buNa.
 CV-give mother.GEN child-OBL NOM sweet:potato
 “Mother gave sweet potato to a/the child.”

2. 中心化理論の概要と応用

本説では、本研究が利用した中心化理論を概説する。中心化理論 (Grosz, Joshi and Weinstein, 1995; Walker, Joshi and Prince, 1998) は、談話における局所的な照応現象をモデル化するために提案されたものである。この理論では、ある発話において話題となっている名詞句を、後続する文に現れる名詞句の先行詞の候補の1つと予測することができることから、指示表現の選択の予測が可能となる。従って、あいまいな代名詞が指す可能性の高い先行詞を特定するのに役立つ、それによって談話の一貫性と理解を高めることができる。さらに、中心化理論は、談話中の各発話に話題の中心が1つあると仮定する。この話題の中心の移り変わりを観察することによって談話の結束性の高さを知ることができる。代名詞は通常、前の発話に言及された話題の中心を指し示すために使用され、会話の連続性を維持するために役立つため、代名詞は中心の遷移において重要な役割を果たす。また、異なる言語間で会話の結束性を比較することで、中心化理論が異なる言語背景でどのように適用され、影響を与えるかをより深く理解することができる。

2.1 「中心」について

「中心」には以下の3種類がある。

表1 3種類の「中心」.

前向き中心 (Forward Looking Center, Cf)	1つの発話に登場する談話要素
後ろ向き中心 (Backwards Looking Center, Cb)	現在の発話で実現されている、前の発話の最高位の Cf
優先中心 (Preferred Center, Cp)	現在の発話で最も高いランクにある談話要素

発話の中のすべての談話要素 (Cf) は、当該発話における顕著性に基づいてランク付けされ、Cf リストを構成する。Cb は現在の発話で実現されている、前の発話の最高位の Cf である。Cp は現在の発話で最も高いランクにある Cf である。中心化理論によると、1つの発話につき最大1つの Cb が存在し、最初の発話や前の発話と談話要素を共有しない発話は Cb を持たない。また、文法的顕著性は言語間で異なるため、異なる言語には異なる Cf テンプレートが存在する (Cote, 1998)。一般的には、主語は目的語よりも上位に置かれ、目的語は他の談話要素よりも上位に置かれる。本研究では、所有格の名詞句については Di Eugenio (1998) に従い、所有される対象が無生物である場合は所有者が所有されるものより上位であり、所有される対象が有生物である場合は所有される対象が所有者より上位であると分析した。

2.2 遷移について

中心化理論を用いた分析では、Cb と Cp の関係や談話の進行に伴う変化が主要な研究対象とされる。遷移 (Center Transitions, Ct) は談話の一貫性を示す指標であり、1つの発話から次の発話への Cf の変化を指す。発話間の中心遷移 (Ct) は、表2に示すように、2つの発話が同じ Cb を共有しているかどうか、2番目の発話の Cb が Cp でもあるかどうかに基づいて、Continue (CONT)、Retain (RET)、Smooth Shift (SS)、Rough Shift (RS) の4つのタイプに分類される。

表2 4種類の遷移 (Walker et al., 1998).

$Cb(U_i) = Cb(U_{i-1})$	$Cb(U_i) \neq Cb(U_{i-1})$
-------------------------	----------------------------

	$Cb(U_{i-1}) = \text{NONE}$	
$Cb(U_i) = C_p(U_i)$	CONTINUE	SMOOTH SHIFT
$Cb(U_i) \neq C_p(U_i)$	RETAIN	ROUGH SHIFT

2つの発話が同じCbを共有している場合、または最初の発話にCbがない場合、2番目の発話のCbがCpであればContinue遷移であり、CbがCpでなければRetain遷移である。2つ目の発話でCbが異なる場合、2つ目の発話のCbがCpであればSmooth Shift、そうでなければRough Shiftとなる。

2.3 中心化理論の2つのルール

中心化理論には2つのルールがある。1つ目は代名詞規則であり、Cfリストのメンバーの中に代名詞で表現されるCfはCbになるというものである。このルールは、Cbはその発話の最も短く、最も一貫した指示表現で表現されるという洞察をとらえたものである。

(2) 代名詞規則

$Cf(U_{i-1})$ のある要素が U_i でゼロ代名詞として実現されている場合、この要素が $Cb(U_i)$ である。 U_i にゼロ代名詞は存在しないが、代名詞として実現される談話要素がある場合、この談話要素が $Cb(U_i)$ になる (Turan, 1998)。

2つ目の規則は順序規則であり、これは遷移は順序付けされていることを主張する。順序規則は、発話間のある遷移が他の遷移よりも一貫性が高いことを反映している。言い換えると、あるトピック(Cb)を維持することは、トピックを変更するよりも一貫性がある。また、トピックを主語の位置に維持することは、他の位置に維持するよりも一貫性がある。発話者は一貫性を最大化しようとするということを仮定すると、Continueが最も頻度の高い遷移であり、Retainが次に頻度の高い遷移であり、次がSmooth Shift、最後がRough Shiftであると予測できる。

(3) 順序規則

各遷移の頻度は、Continue > Retain > Smooth Shift > Rough Shiftの順になっている (Grozs, Joshi and Weinstein, 1995)。

(4)は本研究で使用したナラティブの例である。Continue (ii)に続いて、Retain (iii)、その後Smooth Shift (iv)が用いられている。

(4) (i) *Tayal suyang lnglungan na, laqi nii ni.*

tayal suyang lnglung-an=na, laqi nii ni.
EXCLAM AV.fine think-GV2=3SG.GEN child PROX and
やさしいなあ、この子供は。

Cb(i): 子供

Cp(i): 子供

Cf(i): 子供

Ct(i): CONTINUE

(ii) *O, biqan na, dnyagan namu msa,*

'o, biq-an=na, d<en>iyag-an=namu m-esa,

oh give-GV2=3SG.GEN <PRF>help-GV=2PL.GEN AV-say

ああ、あげた、あなたたちは手伝ってくれたからって。

Cb(ii): 子供

Cp(ii): 子供

Cf(ii): 子供、3人の人たち、もも

Ct(ii): CONTINUE

(iii) *Smiyuk, biqan na pkgkingal.*

siyuk, biq-an=na pe-kengkingal.

<AV>exchange give-GV2=3SG.GEN AV.CAUS-one:by:one

交換だ、ひとつずつあげた。

Cb(iii): 子供

Cp(iii): 3人の人たち

Cf(iii): 3人の人たち、子供、もも

Ct(iii): RETAIN

(vi) *Tru dha hiyi.*

teru=deha hiyi.

three=3PL.GEN person

3人だ。

Cb(vi): 3人の人たち

Cp(vi): 3人の人たち

Cf(vi): 3人の人たち

Ct(vi): SMOOTH SHIFT

(i) に登場した談話要素は「子供」しかないため、「子供」が Cf (i) になる。Cb (ii) は Cf (i) における最高位の談話要素であり、従って「子供」が Cb (ii) になる。また、(ii) におけるもっとも高いランクにある談話要素は主語「子供」であるゆえに、「子供」もまた Cp (ii) になる。これにより、(ii) では Cb (ii) = Cp (ii) であり、また Cb (i) = Cb (ii) であるため、遷移は Continue である。

(iii) でも Cb は変わらず「子供」のままだが、主語が「3人の人たち」になったため、Cp (iii) は「3人の人たち」となる。その結果、Cb (iii) ≠ Cp (iii) となるため、遷移は Retain となる。また、(iii) に登場した談話要素は顕著性順に「3人の人たち」「子供」「もも」がある。

最後に (iv) の発話では、(iii) の最高位の Cf は「3人の人たち」から、Cb (iv) になる。したがって Cb (iii) ≠ Cb (iv)、また、Cb (iv) = Cp (iv) となるため、Smooth Shift である。Cb を移行させるには、Continue、Retain、Smooth Shift の順序が最大限の一貫した方法であることが示唆されている (Grosz et al., 1995; Kibble, 2001)。

Rough Shift については、(5) に示すように、Cf (i) において、最上位の談話要素が主語の「グアバ」で、「グアバ」もまた (ii) で実現されたため、Cb (ii) が「グアバ」になる。これは Cb (i) の「彼」と異なる。故に、Cb (i) ≠ Cb (ii) である。また、Cb (ii) ≠ Cp (ii) であるため、Rough Shift が起きている。なお、Rough Shift は3つのナラティブで11回しかなかった。

- (5) (i) *Paru ka yabas nhuma na da.*
 paru ka yabas ne-huma=na da.
 big SBJ guava CV.PRF-plant=3SG.GEN NS
 彼の植えたグアバは大きくなった。
 Cb(i): 彼
 Cp(i): グアバ
 Cf(i): グアバ、彼
 Ct(i): RETAIN
- (ii) *Lmamu ka kingal seejiq msa.*
 lamu ka kingal se'ediq m-esa.
 <AV>pick SBJ one person AV-say
 一人の人がそれを摘んだそうだ。
 Cb(ii): グアバ
 Cp(ii): 彼
 Cf(ii): 彼、グアバ
 Ct(ii): ROUGH SHIFT

3. 結果

3.1 遷移と指示表現

表 3 は、異なるタイプの遷移で Cb が実現した形を示している。各遷移の数は、Continue (90) が最も多く、それに Retain (32)、Smooth Shift (17)、Rough Shift (11)と続いた。これは中心化理論の順序規則に従っている。また、Continue の場合、Cb がゼロ代名詞(∅)で表現される傾向が特に見られた。Retain の場合、Cb が独立代名詞 (Full pronoun) で表現される傾向が特に顕著であった。すべての遷移において、語彙的名詞句 (NP) が Cb として用いられる頻度が最も低いことがわかった。

表 3 異なるタイプの遷移下での Cb 実現.

	None	∅	Full pronoun	NP	Total
CONT	0	48	22	20	90
RET	0	7	19	6	32
SS	0	8	5	4	17
RS	1	2	6	2	11
NULL ¹	19	0	0	0	19
ZERO ²	37	0	0	0	37
Total	57	65	52	32	206

3.2 態、指示表現と遷移

ナラティブから他動詞文 151 文を抽出し、態に関して分析を行った (表 4)。その結果、AV、GV、CV の文はそれぞれ 100 文、46 文、5 文であった。これは、月田 (2009:175) で述べられているセデック語の態の

¹ “NULL”は Cb のない発話から Cb のない発話への遷移を表す (Poesio et al.,2004)。

² “ZERO”は Cb のある発話から Cb のない発話への遷移を表す (Poesio et al.,2004)。

使用頻度の傾向(AV > GV > CV)と一致している。AV 文において最も一般的な遷移は Continue であり、AV 文全体の 57.0 %を占めた。さらに、Continue における Cb はゼロ代名詞が最も多く、AV-CONT 発話の 61.4 %を占めた。一方、GV 文においては、最も頻繁に見られる遷移は Retain であり、GV 文全体の 39.1%を占めた。また、Retain における Cb は独立代名詞での表現が顕著であり、GV-RET 発話の 94.4%を占めた。

表 4 各態における Cb の指示表現の使用頻度と遷移の関係。³

	AV			GV			CV		
	∅	Pronoun	NP	∅	Pronoun	NP	∅	Pronoun	NP
CONT	35	12	10	5	4	2	0	0	1
RET	2	1	3	1	17	0	1	2	0
SS	4	1	1	2	2	1	0	1	0
RS	1	2	0	2	4	1	0	0	0

4. 考察

3 種類の態、3 種類の Cb 指示表現及び 4 種類の遷移を総合的に考察した結果、AV-∅-CONT と GV-Pronoun-RET の割合が高かったことが特に興味深い。ナラティブにおける AV-∅-CONT の頻用は、主語を省略した AV 文の連鎖が結束性が最も高いことを示唆している。Hinds (1983) はギボンのアプローチから日本語のゼロ代名詞の指示距離を観察し、平均して約 1 であると報告している。つまり、一般にゼロ代名詞は直前の文に先行詞を持つ傾向がある。セデック語でも、日本語と同様に動詞と名詞項の間に一致がないため、ゼロ代名詞の先行詞を特定する際には、一致情報の代わりに談話文脈に頼る必要がある。言い換えれば、ゼロ代名詞を使う際には、談話の結束性がよくなければ誤解が生じるため、一貫性の高い談話が理想的な環境である。また、AV はタロコ語話者に好まれる傾向があるため、AV の頻度が GV と CV よりも高いと報告されている (Sato et al., 2020)。これが、AV-∅-CONT の割合が高い理由と考えられる。

GV-Pronoun-RET については、遷移が Retain となるには、2 つの条件を満たす必要がある。一つは $Cb(U_{i-1}) = Cb(U_i)$ 、もう一つは $Cb(U_i) \neq Cp(U_i)$ である。GV-RET の 18 文のうち、13 文が AV 文に後続していた。AV 文は動作主が主語となる特徴を持っているため、 $Cb(U_{i-1})$ も $Cb(U_i)$ も動作主となる。しかし、GV 文では受動者が主語となるため、 $Cp(U_i)$ は受動者となる。したがって、 $Cb(U_i)$ と $Cp(U_i)$ は異なる談話要素を指す。つまり、セデック語においては、態の変換を利用することで談話のトピックを円滑に変えることができる。要するに、セデック語では、空主語を持つ AV 文の連鎖の中に独立代名詞を主語とする GV 文を挟んで円滑にトピックを変更することが典型的な談話進行のストラテジーであることが示唆された。

【謝辞】

本研究は JSPS 科研費 JP19H05589, JP24H00085 の助成を受けたものです。

【参考文献】

- 月田尚美 (2018) 「セデック語話者による Pear film」愛知県立大学外国語学部 (編) 『愛知県立大学外国語学部紀要. 言語・文学編 50』 291-322. 愛知県立大学.
- 月田尚美 (2009) 「セデック語(台湾)の文法」博士論文, 東京大学.

³ “NULL”と“ZERO”のデータは表に入れていない。

- Aldridge, Edith (2004) "Ergativity and word order in Austronesian languages." PhD dissertation, Cornell University.
- Cote, Sharon (1998) Ranking forward-looking centers. In: Walker, M.A., Joshi, A.K., Prince, E.F. (Eds.), *Centering Theory in Discourse*. Clarendon Press, Oxford, pp. 55–69.
- Di Eugenio, Barbara (1998) Centering in Italian. In: Walker, M.A., Joshi, A.K., Prince, E.F. (Eds.), *Centering Theory in Discourse*. Clarendon Press, Oxford, pp. 115–157.
- Foley, William A (2008) The place of Philippine languages in a typology of voice systems. In: Peter K. Austin and Simon Musgrave (Eds.), *Voice and Grammatical Relations in Austronesian Languages*. CSLI Publications, Stanford, pp. 22–44.
- Grosz, Barbara J., Joshi, Aravind K., Weinstein, Scott (1983) Providing a unified account of definite noun phrases in discourse. In: *Proceedings of the 21st Annual Meeting of the Association for Computational Linguistics*.
- Grosz, Barbara J., Joshi, Aravind K., Weinstein, Scott (1995) Centering: a framework for modeling the local coherence of discourse. *Computational Linguistics* 21 (2): 203–225.
- Hinds, J. (1983). Topic continuity in Japanese. In: T. Givón. (Ed.), *Topic continuity in discourse: A crosslinguistic quantitative study*. John Benjamins Publishing, Amsterdam, pp. 43-93.
- Kibble, Roger. (2001). A reformulation of Rule 2 of Centering Theory. *Computational Linguistics* 27 (4): 579–587.
- Sato, M., Niikuni, K., Schafer, A. J., & Koizumi, M. (2020). Agentive versus non-agentive motions immediately influence event apprehension and description: an eye-tracking study in a VOS language. *Journal of East Asian Linguistics* 29: 211–236.
- Turan, U" mit Deniz, 1998. Ranking forward-looking centers in Turkish: Universal and language-specific properties. In: Walker, M.A., Joshi, A.K., Prince, E.F. (Eds.), *Centering Theory in Discourse*. Clarendon Press, Oxford, pp. 139–160.
- Walker, M.A., Joshi, A.K., Prince, E.F. (1998). Centering in naturally occurring discourse: An overview. In: Walker, M.A., Joshi, A.K., Prince, E.F. (Eds.), *Centering Theory in Discourse*. Clarendon Press, Oxford, pp. 1-28.